巻頭エッセイ

Dちゃんだってバイリンガル！

山本雅代

「バイリンガル」と聞いて，日本では多くの人が「2つの言語が完璧に，母語話者として，あるいは母語話者並に話せる人」を思い描くようである。そんな能力を得たいと願う外国語学習者の思いが投影された理想像なのだろうと思われるが，なかなか理想の通りにはいかない，実相としてのバイリンガル。本稿ではそんなバイリンガルの一人を紹介しようと思う。

Dちゃんはハワイ生まれ・ハワイ育ちの9歳になる元気印の女児である。家族は英語母語話者のお父さん，英語も流暢な日本語母語話者のお母さん，日本語もけっこう使える英語母語話者のお兄ちゃんである。

筆者がご家族の協力を得て，Dちゃんの言語発達研究を始めたのは6年前，Dちゃんが3歳の時である。その時すでにDちゃんの言語環境は英語中心であったが，それでも研究開始後数年は日本語で話しかけるお母さんと過ごす時間が長く，日本語もそれなりに使っていた。しかし長ずるに従い，特に（現地の学校への）就学を機に日本語の使用が顕著に減じ，今では日本語はほとんど話さ／せ(？)ない。2つの言語との接触機会が不均衡な言語環境に育つ子どもに典型的に見られるコースを着実に歩んでいるDちゃんである。

「えっ，それでもバイリンガル？」と訝る読者もいよう。でも，「はい，そうです，バイリンガルです」。ほとんど話さ／せ(？)ないけれど，Dちゃんは，お母さんが日本語で話すことをそれなりに理解するので，受容のレベルで2つの言語が使える。バイリンガリズムの研究分野で，「受容バイリンガル」と呼ぶタイプのバイリンガルである。

決して強要はしないが日本語をもっと話してほしいと願うお母さんの期待に，Dちゃんは自分が十分に応えていないことをしっかり認識している…が，如何せん，どうにもならない。DちゃんにもDちゃんなりの葛藤はあるだろうと想像するが，どっこい，Dちゃんは逞しい。お母さんにこんなことを言ってのける。

〈なかなか日本語で話を返さないDちゃんとお兄ちゃんに，お母さんがちょっと愚痴っている〉

お母さん：だってにほんごのおはなししないじゃん　きょう　ぜんぜん　おにいちゃん　もえいごでしゃべって　D

お兄ちゃん：Yeah?

Dちゃん：Oh, yeah, but I listen to you. No worry.　［以下省略］

「お母さんの言ってることはちゃんと聞いてわかってるよ。心配しなくても大丈夫だよ」と言うDちゃんは，この時，4歳を数ヶ月超したばかり。

言語はどちらも「完璧」ではないし，日本語に至ってはどう間違っても母語話者とは言えないし，母語話者並に話すなど滅相もないというDちゃんではあるが，置かれた言語環境に応じた言語能力を発達させ，それを活用してお母さんとやりとりをしている。加えて，2つの言語との接触という言語経験を通じて，バイリンガルでなかったなら見過ごしていたであろう言語についてのあれこれ（この例でなら，「話すことと聞くことの間には補完関係が成立しうるのだ！」というDちゃんなりの理屈？）に気づいたり，考えたりすることができるという「おまけ」まで得ている。

冒頭のような理想のバイリンガル像からはほど遠いけれど，Dちゃんだってバイリンガル！！

（やまもと　まさよ・関西学院大学教授）

Genius English Communication

CAN-DO リストを作るということ

――“Yes, we CAN DO it!”と言える基盤づくりのために

松尾 美幸

2011年６月，文部科学省により「国際共通語としての英語力向上のための５つの提言と具体的施策」が公表され，各校が『「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標』設定に向けて動き出した。この際に，外部検定試験団体が公表しているCAN-DO リストや CEFR のような完成されたものを作らなければならないとの誤解が生じた高校現場もあったと聞いている。実際，各校に求められているのは，緻密なデータ分析に基づいて縦横軸にぶれが無く配列された能力記述文のリストではない。「目の前にいる生徒たちに卒業時までに，どのような英語力を身につけていてほしいか」を英語科教員全員で協議し，全ての生徒に到達可能な目標を設定すること，そのための授業改善や評価の在り方について目線を合わせた上で実践することである。すなわち，到達目標の共有により授業改善が図られ，よりよい指導，よりよい学びを実現することがねらいであり，CAN-DO リストを作ること自体が目的ではないはずなのだ。

◆ HUKUOKA CAN-DO について

岩手県立福岡高校の CAN-DO リストは，2010年に立ち上げた校内英語指導改善プロジェクトの一環として産声を上げた。プロジェクトの柱は，次の３つである。

① 新学習指導要領に沿った授業実践
② 到達目標・指導・評価の一体化
③ 英語科全員によるチームとしての実践

①では，文法訳読式授業からの脱却を図り，４技能統合型授業を実践する。つまり，「今日の授業で習ったことがわかったか？」で終わるのではなく，「今日習ったことを使って何ができるようになったか？」を確認できる授業へのシフトが図られる。すると，紙ベースのテストのみでは測れないスキルをどのように評価するかという議論が浮上する。そこで②を英語科全員で議論しなければならなくなる。プロジェクト始動と同時に，科内で CAN-DO リストの必要性を共有できたことで，その後の授業改善が比較的円滑に進んだと思っている。

◆ ３年間を見据えた到達目標設定

学習到達目標設定にあたり，まず，３年間で育てたい生徒像について話し合った。教育目標に基づき「知・徳・体の調和のとれたコミュニケーション能力」，それに加えて「地域を誇り地域が誇る地球市民としての資質」を兼ね備えた生徒の育成という目標を共有した。そこで，３年間で，どのような力を，どのようなプロセスで育成していく必要があるかを具体的に洗い出していく。必要とされるスキルの難易度については外部指標を参考にしつつ，学年毎の学習到達目標を逆算する形で設定した。堅実に基礎基本を大切にする４技能統合型の学習活動に加えて，目的に応じた読み方・聞き方を通じて理解する力，豊かな表現力・逞しい発信力を養うためのアウトプット活動を共通の項目として組み入れる。

この到達目標設定によって教科書採択の在り方も変わった。教科書には，授業で大事にしたい「生徒同士」「生徒と教材」「生徒と世界」との

『つながり』と，学習を通じての『気づき』を生む題材集であってほしい。また，Reading を Speaking につなげる Story Retelling の訓練を重ね，段階的に Speech の自由度を高めていく仕掛け作りを授業内で行うのに適した活動配列，そして，その活動に十分なトピックの面白さや問題意識を喚起する深い内容も求めたい。このような視点やニーズに基づいて採択を行った。

こうして 3 年間に体験させたい言語使用場面とそこに求められるスキル，その体験によって育成できるコミュニケーション能力を反映したものが CAN-DO である。つまり，CAN-DO リストとは，「3 年間の言語活動の見取り図」なのである。

◆生徒の自信につなげる CAN-DO の活用

学習到達目標を設定する際に，本校では HUKUOKA CAN-DO GRADE という参照枠を活用した。「グレード」という名称を使用しているため成果指標と誤解されることもあるが，そうではない。入学時の学力の差が大きい生徒集団に対応するために，複数のレベルの到達目標を 1 つの表にまとめたものである。1 種類の到達目標では，一部の生徒にとっては卒業時まで一貫して CAN-NOT-DO リストに終わってしまうかもしれない。また逆に，あるレベル以上の力を持って入学した生徒は，入学早々に目標をクリアしてしまうかもしれない。Slow learners にとっては比較的ハードルを低く設定している Grade 1 から 3 まで，Advanced learners たちにはやや challenging な Grade 4 から 6 まで，というように入学から卒業時まで，どの生徒も最低 2 グレードアップを実現させたいという主旨のものである。年に 2 回，生徒全員が Grade 表内で「自分ができると思う」能力記述文のマスを色鉛筆で塗っていく。毎回異なる色を使うため，自己の伸びや自信の度合いの高まりが目に見える。各生徒が，「今自分にできること」と「これからできるようになりたいこと」を確認し内省する機会を保障することは，動機づけにもつながる。これが，生涯にわたって外国語を学び続ける自律した学習者の育成にも資すると考えている。

◆ CAN-DO を生かした授業デザイン

CAN-DO リストの形で明示した学習到達目標をいかに観点別評価規準とリンクさせた上でシラバスを作成するかについては，自治体や各種研究会にて研修が行われているので，この誌面での詳しい説明は割愛する。本校では，各科目のシラバスに，学年の学習到達目標を明記した後に，各単元の目標を評価の観点別に掲げ，個々の目標に対応する評価規準に相当する目標 CAN-DO を提示している。幸いにも，*Genius English Communication* シリーズに用意されているシラバス例と観点別評価規準例が，実に細やかに，かつ指導との整合性を図りやすい適切な文言で与えられているため，シラバス作成には大いに役立った。

例）　1 年次学習到達目標「話すこと」より

・聞いたり読んだりしたこと，学んだことや経験したことに基づき，情報や考えなどについて，自分の意見を表現したり相互に意見を交換したりすることができる。

↓

単元の目標：Lesson 3（*Genius 1*）
評価規準：〈表現〉の能力
・絵や写真などの資料を使いながら，よく知っている話題（日本文化）に関して，説明する。

↓

言語活動の目標：（授業時に生徒に提示）
・コンセプト・マップや絵を使って，風呂敷の歴史について，ペアで聞き手にわかりやすくリテリングすることができる。

発表時には，つなぎ言葉の活用やアイコンタクト等発表態度を褒めつつ，生徒が“My English”を駆使しながらプレゼンテーションができるように促す。

◆教科書や評価との関連づけ

「CAN-DO リストを評価のために活用する」ことは，「CAN-DO をそのまま測定の道具として使用する」ことではない。到達目標が達成できたかどうかを確かめるテスティングは，整合性・妥当性ともに吟味された内容のものでなければ生徒の英語力・学習意欲の向上につながらない。

本校では，各期にスピーキングとライティングのテストを実施し，評価に組み入れた。4 技能統合型の授業を行えば，当然のことながら，表現の力はパフォーマンス・テストによって評価する必要が生じる。例えば，即興スピーチとその内容についての Q&A といった簡単な表現・やりとりの力を確認するインタビュー形式のテストである。「内容・流暢さ・正確さ・やりとりを続けようとする意欲・態度」といった観点に沿って加点方式で評価した。待機している生徒たちはその間，ライティングのエッセイテストに取り組んでいる。パフォーマンス・テストを実施して嬉しい驚きだったのは，被験者である生徒たちの楽しそうな表情である。指導者と個別に英語で対話し，肯定的なコメントをもらうことが嬉しいのだ。生徒が英語のテストを，「自分がここまではできた」と実感できるチャンスだと前向きに捉えていること自体が CAN-DO の成果であると実感している。

◆ CAN-DO リストを用いた指導の成果

CAN-DO リストを用いた到達目標を，生徒と教師，および教師同士が共有することで，自分にできることが増えていく実感を持って生徒たちは意欲的に学ぶことができる。同時に教師も，良質なインプットと豊かなアウトプットを導く授業を目指し授業改善に取り組む。また，共通の目標やメソッドがあるからこそ教員集団は真の意味で切磋琢磨し互いから学ぼうとする。良い学び，良い指導は，授業の質そのものの向上につながる。

Genius I の Lesson 10“Life in a Jar”を扱った授業中のことである。英語が大の苦手な F 君が，“If you were Irena, would you oppose the unfair seating system?”という自由英作文で“*No, I wouldn't, because. . .*”で力つきてしまった。本校のライティング CAN-DO には「友人が書いた英文の中で，内容が面白い部分や気に入った表現などに下線を引きながら読み，内容について簡単なコメントを書くことができる」という能力記述文がある。互いにエッセイを読み合い，コメントし合った後，彼がライティング欄に残した十分過ぎるほどの空欄は，色鮮やかなペンで書かれた友人たちのコメントで満たされていた。

- Why? I think you could oppose the school's seating system.
- I think if I were Irena, I wouldn't oppose. I want to know your reason!!
- I think discrimination is bad. What do you think?

教師がコメントを書く余白はなかった。

“Yes, I CAN DO it!”と生徒が胸をはり，“Yes, you CAN DO it”と教師が生徒の背中を押し，“Yes, we CAN DO it!”と教師同士が肩を組む。そうした機会を与えてくれる宝島の地図が CAN-DO である。そして今まさに自分の目の前で，生徒同士が“Yes, you CAN DO it!”と励まし合い，逞しく学びの共同体を築きつつある。教室に散りばめられたキラキラした奇跡の瞬間を楽しみながら，新しい気づきや発見，生き生きとしたやりとりに満ちた授業を展開していきたい。

◆参考文献

文部科学省．(2013)．『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』

（まつお　みゆき・岩手県立福岡高等学校教諭）

Genius English Communication

コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指して

駒澤 誠二

◆生徒に身につけさせたい力

コミュニケーション英語Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの授業を通して生徒に身につけてもらいたい資質として，学習指導要領では「外国語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を挙げている。生徒が外国語，特に英語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うにはどのような指導が必要なのだろうか。勤務校で採用している *Genius English Communication* の教科書の特徴を生かした指導例を紹介したい。

① 音読活動で伝えたい内容を蓄積する（*Genius I*）

英語でコミュニケーションを図ろうとしても，伝えたい内容がなければ，コミュニケーションは成り立たない。そこで伝えたい内容を蓄積していくことが必要になってくる。まずは，教科書の内容を自分のものにしていくことから始めたい。そのための活動としては音読が有効である。

音読活動ではシャドーイングに代表されるような音のプロソディーの習得を目指した活動も大切だが，意味を考えながらの音読活動も忘れてはならない。音読に熱心に取り組んでいる生徒の中には，声を出すことだけが目標になっていて，内容を意識せずに活動している生徒も多い。そのような姿勢では音読活動を Output につなげることはできない。Read & Look up をさせたり，本文の一部を隠したり空欄にしたりするなどして，生徒が音読をしながらも英文の内容に意識がいく工夫をしていく必要がある。

また，音読活動が Output につながる活動であることを考えると，本文の中の必要な部分だけを音読すればよいケースもあり得る。すなわち，Output 活動に結びつけたい内容や表現が含まれていない部分は音読活動を飛ばすのも1つの手である。さらに，英文が難しく，生徒にとって内容を考えながら音読をするのが困難なレッスンは，本文を易しい英語で Rewrite したものを音読させることも必要だ。音読活動をしても，英語で伝えたい内容のストックを増やすということにつながらなければ意味がない。

また，音読活動の出口を指し示すことも重要だ。音読活動の後に Retelling や Summary Writing の活動をすることをあらかじめ伝えておくことで，生徒が何のために音読活動をしているのかが明確になるだろう。

Genius I の教科書は内容的に優れており，英文の Retelling や Summary Writing などを通して英語で伝えたい内容のストックを増やしておきたい。Lesson 3 の “More Than Just a Piece of Cloth” や Lesson 8 の “Water Crisis” では，私たちが見過ごしがちな日本文化の背後にある日本人の心や日本の食料自給率，仮想水の輸入の現状を知ることができ，外国人に日本のことを伝える際に役立つ内容である。また，Lesson 4 の “Borneo’s Moment of Truth” や Lesson 9 の “Coffee and Fair Trade” は，「森林の伐採はよくない」とか「フェアトレードの製品を積極的に買いましょう」といった意見に陥りがちなテーマ

だが，森林伐採をせざるを得ない状況や生産者側の方にも努力が必要だといった視点も与えられており，環境問題や貿易問題に話題が及んだ時にも活用できる内容であろう。

教科書の内容と全く同じ内容を伝える場面がどれだけ訪れるかわからないが，英語で伝えたい内容を１つでも多く蓄えておくことは決して無駄ではない。自信を持って話せる内容が多ければ多いほど，積極的にコミュニケーションできる場面は増えるはずである。

② 教科書の表現を活用して使える表現を増やす（*Genius I* & *Genius II*）

実際のコミュニケーションでは，自分の経験や意見をその場で英語にし，伝えていかなければならない場面が多々ある。そのような場面に遭遇した時でも，積極的にコミュニケーションを図ろうとするためには，瞬時に使える英語表現を十分に身につけておくことが必要だ。そのための活動としては，クイック・レスポンスが有効である。

この活動を実施する際には，英単語１語で覚えさせたほうがよいものと，チャンク（意味のまとまり）で覚えさせた方がよいものとをしっかり区別して生徒に提示しなければならない。

Lesson 1 “A Village of One Hundred” に出てくる “gap” という単語を例に挙げたい。新出単語であるこの単語を１語で覚えさせても，いざという時には使えない。この単語を１語で使う場面はあまりないからだ。教科書の本文では，“close the gap between the rich and the poor” と出てくるので，このまとまりで覚えさせたい。なぜなら，例えば「差を埋める」ということを英語で伝えたい時に，「埋める」は何かな，“bury” かな，と迷っているようではコミュニケーションできない。２秒以内に頭に浮かんでこない表現は実際の場面では使えないと言われている。実際のコミュニケーションの場面を想定し，役に立つフレーズで生徒には覚えさせたい。

Genius I の教科書では Lesson 1 から “it's worth the effort” や “broaden one's horizons” など，役に立つ表現が数多く登場する。また，語彙は文脈の中で増やしていかなければ，結局どの場面で使えるのかがわからず，場合によっては状況に合わない不適切な表現を用いることにもなりかねない。教科書に出てくる表現を軽視せず，十分に活用することを薦めたい。

③ Research & Opinion Writing で伝えたい内容を蓄積する（*Genius II*）

コミュニケーション英語Ⅱの授業では，自分で調べたこと，自分の考えや経験などを発表させる活動を通して，伝えたい内容の蓄積を図りたい。

Genius II の教科書から具体的な例をいくつか紹介したい。Lesson 6 の “Machu Picchu : City in the Clouds” の Part 4 では，マチュピチュが世界遺産に登録されたことで生じた問題点が取り上げられている。日本にも数々の世界遺産があり，その素晴らしさを紹介するのはもちろん大切だが，世界遺産に登録されたことでもたらされた負の部分はないかを調査し，発表させることも面白いだろう。

自分の考えを発表させる活動では，Lesson 4 の “Ahmed's Gift of Life” や Lesson 10の “Donald Woods : Real Journalism Takes Courage” で Ahmed の父親や Donald Woods のとった行動を Retelling させ，その後でそれぞれの行動に対する自分の意見を述べさせたい。自分の意見を述べるにあたっては，パレスチナ問題やアパルトヘイトなどの背景知識が必要となる。世界史の学習内容とうまくリンクさせれば，教科横断的な取り組みへと発展させることができるだろう。

Lesson 8 の “Emotions Gone Wild” や Lesson 9 の “Michael J. Sandel on Kant : Freedom and Morality” も内容的に大変興味深い。これらのレッスンでも，本文の内容を Retelling した後でそれぞれの考え方に対する自分の意見を発表

させたい。

実際のコミュニケーションの場面を想定した場合，ただ自分の意見を述べるだけでは説得力が弱い。自分の意見の根拠となった背景を述べることは大変有効である。そういう意味でも，自分の意見を発表する前に，本文の内容の Retelling は是非とも取り入れたい。

④　正確さと流暢さを高める（*Genius III*）

コミュニケーション英語 I や II を通して，かなりの表現力が身についているはずである。コミュニケーション英語III では，その表現力に磨きをかけること，特に Accuracy と Fluency を高めることを重視して指導したい。勤務校の生徒のほとんどが大学受験をすることを考えると，身につけた表現力を受験でも使える力につなげていくことは必要である。受験で求められる「辞書を使わずに，限られた時間内で，英語で表現する力」を育む活動を是非とも取り入れたい。

◆「英語で授業」：想像力を生かした本文理解

「英語で授業」をすると，生徒が本当に本文を理解しているのだろうかと不安になることがある。そのため，本文を読む前に挿絵や写真などを利用してスキーマを活性化させたり，本文を易しい英語で言い換えたり，データや実物，写真や映像などを見せ，具体的なイメージを摑ませたりすることも多いかと思われるが，それとともに是非とも活用したいのが生徒の想像力である。

「英語で授業」をする際，教師ばかりが英語を話していたのでは，生徒のコミュニケーション能力は身につかない。授業の中に Interaction の場面を多く取り入れ，生徒に英語を使う機会を提供しなければ意味がない。生徒との Interaction があれば，生徒が教師の英語を理解しているのか，生徒が教科書の英文をどう捉えているのかを確認でき，また，生徒にとっては，授業に参加しているという充実感を抱くことができる。

ただ Interaction が大事だからといって，答えが本文に明確に書かれている発問ばかりでは活発な意見交流は期待できない。本文から得た情報を基に，生徒が想像力を働かせなければ答えられない発問も是非とも組み入れたい。想像力を働かせて得た答えは生徒によって異なることが多いため，生徒同士でコミュニケーションをする必然性も生まれてくる。また，時には生徒から予想もしない答えが返ってきて，授業の場が和むこともある。生徒が本文から想像して抱いたイメージを出発点とし，そこから筆者が伝えたいメッセージを皆で考えていく，その過程を踏むことで，本文を深く理解することができるのではないだろうか。

ここで，想像力を働かせなければならない発問例を *Genius I* の中から簡単に紹介したい。

①　単語の持つイメージを想像させる発問例

・Lesson 4 “cutting down trees <u>sustainably</u>.”
　→ Imagine that you are a woodcutter. Out of 1000 trees, how many trees would you cut down sustainably?

②　登場人物の気持ちを想像させる発問例

・Lesson 7 “made her give up the medal.”
　→ How do you think Rusty felt at that moment?

③　英文が表す内容を想像させる発問例

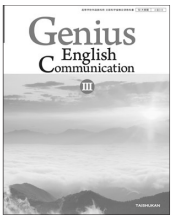
・Lesson 5 “When life gives you lemons, make lemonade!”
　→ What does it mean?
・Lesson 9 “Shopping is politics.”
　→ Why is shopping politics?

◆おわりに

Genius I, II, III の特徴と「想像力」を生かした授業の実践が，積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする人材の育成につながるよう，さらなる研鑽を深めていければと思っている。

（こまざわ　せいじ・岐阜県立斐太高等学校教諭）

Genius English Communication



Genius III のご紹介

高校英語3年間の最後の仕上げとなる「コミュニケーション英語Ⅲ」教科書の *Genius English Communication III* は，学習指導要領の目標としてあげられた「社会生活において活用できる」ことを意識し，*Genius I, II* で培った力をさらに伸ばす内容構成です。

◆世界を取り巻く重要な課題をより深く考察する

Genius I, II では，「地球村」の住民の一人として，生徒に世界全体の課題を自分たちの問題として考える視点を与える教材を多く取り上げてきましたが，*Genius III* ではそれをさらに発展させ，深めるような教材を用意しました。たとえば，〈環境問題〉については，*Genius I* ではボルネオの熱帯雨林の環境破壊の現状を理解し（Lesson 4），*Genius II* では環境問題の解決法のひとつとして，自然からヒントを得た科学技術について学びますが（Lesson 3），*Genius III* では，環境に配慮した生活を島全体で実践しているデンマークの小さな島を紹介します（Lesson 3）。また，〈社会貢献〉というテーマでは，ボランティア（Ⅰ：Lesson 5）→ジャーナリズムによる社会変革（Ⅱ：Lesson 10）→日本人の国際貢献（Ⅲ：Lesson 1）というように，身近な話題から始まり，最後は世界全体を見渡すことができるようなスパイラルに広がる観点を提供しています。

このように重要な問題については，3年間でさまざまな観点から学べる教材を用意し，グローバルな視点を身につけることを目指しています。

◆最新の話題・トピックにも注目

近年，話題を集めている最新のトピックについても目配りした教材を収録しました。たとえば，山中伸弥教授のノーベル賞の受賞で注目を集めたiPS細胞と医療への応用についても，科学的見地から分かりやすく解説した教材を用意しました（Lesson 7）。また，昨年，2020年オリンピック・パラリンピック東京開催が決定しましたが，パラリンピックの歴史と参加するアスリートの想いを取り上げた教材もあります（Lesson 8）。

◆現代社会に対応する「読む力」の育成

現代社会では，インターネット上に大量の文字情報が飛びかい，その中から自分に必要なかつ信頼性の高い情報を選び出す能力が求められています。また，大学入試でも長文化が進み，文章の概要や全体の構成を捉える力が問われています。それらに対応する読む力をつけるためには，教科書でも英文の量を保障する必要がありますが，*Genius* ではⅠ～Ⅲの合計で，Lesson本文のみで約2万8千語，Read On! も含めると約6万語弱の英文を掲載しています。教科書だけで，多読指導・長文読解指導までできる構成です。

◆自分の考えを表現するエッセイ・ライティングと実用的なリスニングの課題

Genius I, II では，さまざまなコミュニケーション活動を通して，自分自身の考えを表現してきましたが，*Genius III* ではその仕上げとして，レッスンの題材に関連したテーマで100～150字程度の英文エッセイを書く課題を用意しました。また，会話や説明文，ニュースなどを聞き取る実用的なリスニングの課題も用意し，「社会活用」を意識しています。

（編集部）

Compass English Communication

Compassを使った３年間の指導

――どのような力を身につけさせるか

田中 知聡

◆３年間でどのような力を身につけさせたいか

Compass English Communication I・II・III は，英語で情報を得る力や情報を発信する力を着実に身につけさせる教科書です。生徒とコミュニケーションをしながら授業を展開するのが楽しくなる題材で，言語活動も活用しやすく工夫されています。それぞれの学校の教育課程に応じて「Ⅰを全員履修，Ⅱを選択履修」「Ⅰ・Ⅱを全員履修，Ⅲを選択履修」「Ⅰ～Ⅲを全員履修」などの履習パターンが考えられます。学校の教育目標や生徒の実態に応じて，３年間を通して生徒に「どのような力をつけさせたいか」という学習到達目標を具体的に考えることが求められています。

３年間を見通した計画を立てる際には，教科書の構成やそれぞれのレッスンの特長を学習到達目標と結びつけて計画を立てると効果的です。教科書 *Compass I・II・III* を使ってどのような力を身につけさせることができるのか，授業の実践例や学習到達目標の例を紹介したいと思います。

◆高校英語の基礎をしっかりと固める

―*Compass I*

高校に入学してきた生徒が，徐々に高校の授業に馴染めるような内容から始まっています。英文も難しすぎず，英語で行う授業にも慣れさせながら進めることができるでしょう。

目標を設定する際には，それぞれのレッスンの特長を生かして，例えば「日本のゆかたや着物についての会話を聞き，概要を把握することができる」(Lesson ３)，「辞書を活用しながら物語文を読んで出来事を正しく把握することができる」(Lesson ４)，「色と生活のかかわりに関する説明文を繰り返して聞いて，その内容を理解することができる」(Lesson ５）などを計画することができます。目標を示してから授業を行えば，生徒も目的意識を持って授業に取り組めます。

教科書見開きの右ページにある“Use it!”や課末の“Enjoy communication”などは，ペアやグループでの活動やパフォーマンス評価，ALTとのTTでも活用することができます。平成25年度に私の勤務校では，*Compass I* を使用した授業において，年間４回のパフォーマンステストを実施し，評価にも組み入れました。レッスンの内容と実施時期を考慮して，「３つ以上の情報をもとにして自己紹介をすることができる」(Lesson １)，「論理展開を意識して暗唱することができる」(Lesson ３)，「空港や税関での場面を設定し，聞かれたことに対して即興で答えることができる」(Lesson ５）などの目標を立ててパフォーマンステストを実施しました。生徒はとてもよく取り組み，コミュニケーションに対する興味・関心を高めることができました。

教科書の内容も，論説文，会話文，物語文とさまざまなタイプの英文で少しずつ難易度を上げていくため，生徒は徐々に長めの英文にも対応する力をつけることができます。また，科学的な視点や文化的な視点など，生徒の視野も広げながら「コミュニケーション英語Ⅱ」へとつなげていくことができます。

◆広く社会に目を向けて英語力をつける
—*Compass II*

「コミュニケーション英語II」ではさらに語彙力を高め，まとまりのある英文を「聞く」「読む」ことに慣れさせていきます。「会話の流れやつながりを理解し，メッセージを的確に把握することができる」(Lesson 2)，「論理展開を把握しながら睡眠のメカニズムを理解し，要約することができる」(Lesson 7) のように，「聞くこと」を中心に展開したり，「読むこと」を中心に展開したりすることができます。新出単語も増えてくるので，予習として辞書で引かせる，推測させる，あらかじめ与える，ペアやグループで協力して調べさせるなど，学校の目標とする生徒像や生徒の実態に合わせて対応します。また，「話すこと」や「書くこと」の表現活動に焦点を当てて授業を進めていくことも可能です。相手とのやりとりを通して英語を使うタスク活動が，課末の“Enjoy communication”に紹介されているので授業中の活動やテストに活用することができます。パフォーマンステストとして，レッスンの内容に関連させて「尊敬する人についてのスピーチをすることができる」(Lesson 1)，「インタビューをして情報を収集し，その結果をグラフにまとめて発表することができる」(Lesson 7) などを計画し，4技能をバランスよく高めていく指導をすることができます。

◆自分の力で情報をやりとりする力を育成する
—*Compass III*

高校3年間の集大成となる「コミュニケーション英語III」の授業では，自分の力で積極的に英語を聞いたり読んだりする理解力を身につけさせることができます。

(1) 応用するための基礎を固める Unit 1

Unit 1は，次のようにステップを踏みながら reading strategies を育成できるように構成されています。

① 読む前に予測する力を養う

- 写真，絵，図表から内容を予測する力
- タイトルや見出しから内容を予測する力

私たちが英字新聞を読む場合，写真や見出しからおよその内容を予測して読むということはよくあることです。グラフや数字があれば，そこに注目することも重要なスキルです。Lesson 1では生徒が持っている背景知識やさっと見て得られる情報を利用して推測する力を身につけさせます。

② パラグラフの構成を意識する力を養う

- パラグラフの main idea を捉える力
- トピック・センテンスと支持文を捉える力

トピック・センテンスと支持文の関係を意識できるかどうかは，論説文を読む上で最も重要なスキルの1つです。このことを学ばせるには，論理展開がしっかりとした良質の英文を生徒に示すことが重要です。Lesson 2では，生徒にパラグラフについて理解させ，論理的に読む力を身につけさせます。

③ 文章全体の流れをつかむ力を養う

- 序論で主題や主張を捉える力
- 本論で具体的に論理展開を捉える力
- 結論で主張を捉える力

長い英文になればなるほど，生徒は読むのをあきらめてしまうことがあります。しかし，文章構成の特徴を知っておけば，要点をつかみながら読み進めることができます。Lesson 3では序論，本論，結論の捉え方を身につけさせます。

④ 英文のタイプに応じて読む力を養う

- 論説文を論理的に読む力
  (要旨・パラグラフ・筆者の考えなど)
- 物語文を展開に注意しながら読む力
  (登場人物・出来事・心情など)

論説文には論説文の，物語文には物語文の読み方のコツがあります。その読み方のコツを知らない生徒と，知っている生徒では，読んで理解したり考えたりできる内容がずいぶんと異なってきます。Lesson 4～6 では英文のタイプに応じて読むコツを身につけさせます。また，Lesson 7 では指示語を捉えながら読む力を身につけさせます。

⑤ 主体的に読む力を養う

・メッセージを受け取る力 ・自分で考える力

高校生が例えば「自然界の生物の構造とテクノロジー」についての英文を読んだときに，本当の意味で「読めた」と言えるのはどのような状態を指すのでしょうか。「コミュニケーション能力」という観点からみると，筆者のメッセージをしっかりと受けとめて，そのメッセージをもとに考え，私たちの生活や生き方に結びつけ，自分の意見を持つことが重要です。そのためには，「興味を持って読む」「筆者の立場になって考えて読む」「現代社会や国際問題と絡めて読む」「ここから学べることは何かを考えて，考えたことを発信できるように読む」といった主体的な読みをすることが必要になります。Lesson 8 では生徒に英文と自己とを結びつける力を身につけさせます。

この Unit 1 を中心に授業を展開して基礎をおさえていくのもよいですし，Unit 1 で要点をおさえた上で，次の Unit 2 を中心にじっくりと力をつけさせるのもよいと思います。

⑵ 十分な語彙力と読む力を育成する Unit 2

Unit 2 ではさまざまなトピックについて，Unit 1 で学んだ reading strategies を応用させていくことができる構成になっています。それぞれのレッスンの右側のページに Comprehension として設問が，また課末には Review として内容把握問題があります。英文の難易度も徐々に上がってくるので，学校の実態に応じてさまざまな活用の方法が考えられると思います。

例えば，「まとまりのある文章を短時間で読み，概要を把握することができる」ことを目標に設定し，レッスン全体を通して速読させたり，「論説文の特徴を理解し，内容を正しく理解することができる」ことを目標にして論理展開に焦点を当てた指導をしたり，「まとまりのある英文を聞き，出来事の順序や登場人物の心情を把握することができる」ことを目標にしてリスニングに焦点を当てて扱ったりすることができます。

また，課末の Phrases & Structures で扱われている構文に着目させて，さらに文法力や表現力を育成したり，Further Practice ではさらに高い語彙力，リスニング力，表現力を育成したりすることも可能です。

また，「理解した内容をもとにスピーチをすることができる」「ディベートをして自分の意見を伝えることができる」等のパフォーマンス課題やタスク活動につなげると，さらに高いコミュニケーション能力が育成できると思います。

⑶ 大学や社会への橋渡しとなる Unit 3

Unit 3 の内容は，日常生活で読むような雑誌や，専門誌などで目にする文章が扱われています。笑いの効果，スープの魅力，モネの絵と日本美術，雪の結晶など，知的好奇心をくすぐる内容になっています。大学に進学した後や，社会に出た後も，英文に触れて情報を得たり発信したりすることができる力を生徒に身につけていってもらいたいものです。そのような姿を思い描きながら，ALT との TT で読み聞かせをしたり，音読の練習に用いたりするのも楽しいのではないでしょうか。

（たなか　ちさと・山梨県立甲府城西高等学校教諭）

Compass English Communication

進路実現に向けて，基礎から着実に力をつける教科書

── *Compass III* の編集方針

江原　美明

◆ *Compass III* の編集方針

コミュニケーション英語IIIの目標は，コミュニケーション英語IIの学習を踏まえ，「実際の社会生活において活用できる」英語力を身に付けることとされています。そのためには基礎固めが不可欠。学習指導要領に準拠し，生徒の将来の社会生活や進路実現に貢献できる教科書を作ることを常に念頭に置き，次の方針に従って *Compass English Communication III* の編集にあたりました。

⑴　段階的に読む力を育成する

初見の英文を自分の力で読み解くスキルを無理なく身に付けられるよう，３つの Unit を通し段階的に読むことに習熟し，足場がけ（scaffolding）の必要が徐々になくなることを目指しました。

Unit 1：リーディング・スキル演習
↓
Unit 2：パラグラフ・リーディング
↓
Unit 3：パッセージ・リーディング

Unit 1 ではリーディング・スキルを体系的に学び，Unit 2 では英文の論理構造とパラグラフの要点を把握する練習を重ね，Unit 3ではまとまった英文で力試しをします。

⑵　論理的思考力を養う

論理的思考力を徹底的に養うことを目指し，本文の要点把握を助ける設問，パラグラフ内，パラグラフ間の論理展開と本文の概要を簡潔に図式化したチャート（graphic organizers）を多数掲載しました。

⑶　柔軟な授業展開を可能にする

全体的にすっきりとしたレイアウトを採用し，活動や解説を精選しました。教科書の活動に制約され過ぎず，先生の持ち味を活かした柔軟な授業展開や言語活動を行うことが可能です。

⑷　言語活動と題材を通して学習意欲を高める

学習意欲を安定して維持させることが学習効果を高めることから，次の点に配慮しました。

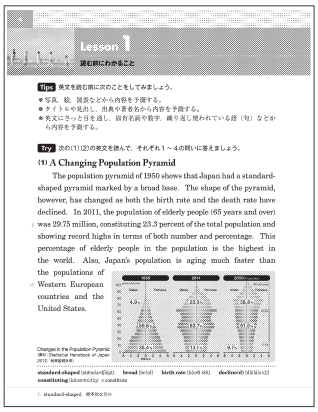
- 早期に具体的リーディング・スキルを扱うことで明確な目的意識，学習への充実感，自ら学ぶ意欲を高める。(Unit 1)
- 設問やチャートの工夫により，和訳に頼らず本文を理解する方法を示す。(Unit 1, 2)
- 練習問題や自己表現課題の例文を生徒に身近な内容にすることで，語彙・文法の定着を促進する。(Unit 2)
- 多様な題材を採用し，生徒の知的好奇心を刺激する。(Unit 1, 2, 3)

◆ *Compass III* の構成

Compass III の構成と，そのねらいについてご紹介します。

⑴　Unit I: リーディング・スキル演習

８つのレッスンが配置され，将来初見の英文を読んで理解するために必要な tips を演習形式で学びます。「英文を読む」とは何かが具体的かつ詳細に示され，ユニットの終わりには27項目の tips がチェックリスト形式で一覧表示されています。



Lesson 1

読む前にわかること

Try! 英文を読む前に次のことをしてみましょう。

- 写真，絵，図表などから内容を予測する。
- タイトルや見出し，出典や著者名から内容を予測する。
- 英文にさっと目を通し，固有名詞や数字，繰り返し使われている語（句）などから内容を予測する。

Try! 次の(1)(2)の英文を読んで，それぞれ1～4の問いに答えましょう。

(1) A Changing Population Pyramid

The population pyramid of 1950 shows that Japan had a standard-shaped pyramid marked by a broad base. The shape of the pyramid, however, has changed as both the birth rate and the death rate have declined. In 2011, the population of elderly people (65 years and over) was 29.75 million, constituting 23.3 percent of the total population and showing record highs in terms of both number and percentage. This percentage of elderly people in the population is the highest in the world. Also, Japan's population is aging much faster than the populations of Western European countries and the United States.

Changes in the Population Pyramid (Bill: Statistical Handbook of Japan 2012 [illustration])

standard-shaped [stǽndərdʃéipt] **broad** [brɔ́:d] **birth rate** [bə́:rθ réit] **decline(d)** [di:kláin(d)] **constituting** [kənstítu:tiŋ] ＜constitute

：standard-shaped　標準的な形の

Unit 1，Lesson 1

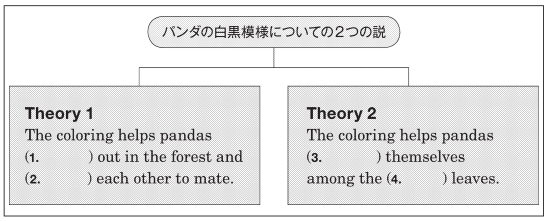
例えばLesson 1「読む前にわかること」では，写真・図，タイトル，出典，あるいは英文に含まれる固有名詞やキーワードを見て，英文の内容を予測する練習をします。これは，実生活でその情報が自分にとって必要かどうかを判断する際も，試験場で初めて読む英文に取り組む際も，重要なスキルと言えます。

(2)　Unit 2：パラグラフ・リーディング

8レッスン，各3～4パートで構成され，言語活動を通した4技能の総合的育成を目指します。各レッスンの流れは次の通りです。

①レッスン扉（写真・イラスト）
②各パート本文・Comprehension（見開き）
③ Review（リスニングと全体のサマリー）
　Phrases & Structures（表現・構文の整理）
④ Practice（重要語彙，文構造を使う練習）
⑤ Further Practice（語彙，リスニング，自己表現活動）

各パートでは，Comprehensionの設問やチャートを活用してパラグラフの要点，論理構造を捉える練習を行います。チャート（下図参照）は本文の再生活動（retelling）にも活用できます。



Unit 2，Lesson 1の Comprehension

(3)　Unit 3: パッセージ・リーディング

説明文・エッセイ・物語を含むレッスンが5つ用意されています。センター入試長文問題レベル（500～600語）の良質の英文と，その内容に関する要約英文完成問題（150～200語），内容真偽（T/F）問題や選択肢問題から構成されています。

◆ *Compass III* の題材

英文を読むことにより，私たちは語彙・文法・談話構造などの形式スキーマだけではく，社会生活に於ける思考・判断の礎となる内容スキーマ（一般知識）を広げることができます。題材の選定にあたっては，将来に向けて高校生が必要とする形式・内容双方のスキーマの拡充に役立つ英文を採用するよう心がけました。例えば，

a population pyramid / as busy as a bee / how to cope with stress / weather prediction / biological clocks / universal design / the civil rights movement

は，Unit 1の異なるレッスン本文から拾ったチャンクですが，私たちが人や社会，自然や動物，科学的発見から何かを学ぶ際に出会う概念の宝庫です。歴史や文化，伝説や物語からも，こうした概念，知識，教訓を学ぶことができます。

Compass III では，現代英語で使用頻度の高い語彙・文法を題材という文脈の中で学び，同時に思考・判断の核となる重要な概念を学べるようにしました。生徒たちは，授業の中でこうした概念を英語で学ぶことにより，英語力と同時に社会の諸問題について論理的・批判的に考え，解決策や新たな考えを創造する能力を徐々に身に付けると考えています。

＊

これからの時代を生きる教え子たちは，英語が使えることで社会貢献の舞台が確実に広がるでしょう。*Compass III* が高校生にとり一生の財産となる英語力，考える力，教養を身に付ける助けとなることを願っております。

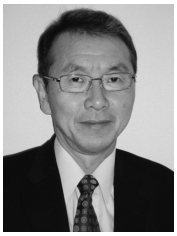
（えはら　よしあき・
神奈川県立国際言語文化アカデミア教授）

Departure English Expression

授業を変えよう，生徒を変えよう

── *Departure I・II* を使って

山岡 憲史



◆新課程での授業改善

新学習指導要領のもとでの授業が開始されて１年が経ちました。４技能統合型の授業や「英語で行うことを基本とする」授業で入試に対応できる学力は保証できるのか，英語で授業を進めて生徒は理解できるのかなどの戸惑いから，従前の指導観を変えることに躊躇している先生方も多いのではないでしょうか。

私は，過去２年間，文部科学省「英語力を強化する指導改善の取組」の運営指導委員として，福岡県，鳥取県，兵庫県，滋賀県の指定校に関わってきました。どの学校でも，不安を抱えながらのスタートでしたが，先生方と県教委の努力による授業改革を通じて，生徒の授業に臨む姿勢が見事に変化してきたことに驚きます。CAN-DO リストに基づいた有意義な言語活動や All English の授業展開は，意欲だけでなく，模試や GTEC などでの好結果にもつながっているという報告も受けています。「もう昔のような授業には戻ってほしくない」という生徒の声，「英語が苦手な生徒たちがとても意欲的になってきた」という先生方の声を聞くと，先生方の姿勢ひとつで，劇的なパラダイムシフトができることを確信しています。

◆ *Departure I* で表現の基礎力を

Departure English Expression I は，このようなパラダイム転換を目指して，「強い意欲と確かな表現力をつける」ための教科書として誕生しました。

旧課程での指導は，高校で習得されている文法事項を１年生ですべて学習させ，和文英訳を超えたライティング指導は２年生以降で行うことが通例でした。しかし，文法事項を詰め込んだだけでは，すぐ表現力を伸ばすことは望めません。表現に必要な最小限の文法事項を確実に定着させ，それを使って実際に書いたり話したりする指導から始めること，それも１年生から始めることが表現力を伸ばす鍵だと考えます。

Departure I では，このような方針のもと，まず，精選された文法事項を使って，４技能すべての活動を行います。特にライティング活動では，習得させるべき言語材料を使い，かつ文章構造や論理展開を意識させながら書かせることを大切にして，無理なくライティングに慣れることを目指しています。また，書いたことをもとに話すという手順を踏み，内容を伴った正確なスピーキング力を養えるように配慮しています。

◆ *Departure II* でより高い表現力を

Departure II では，*Departure I* でつけた１パラグラフを書く力と正確に話す力をさらに高めるために，多くの工夫を施しました。

Part 1 では，*Departure I* で学んだ事項を文構造や表現別に復習し，より高度な事項を学びます。Part 2 では，使うという観点で，機能的に表現を提示しました。Part 1，2 で英語で表現するための技法として重点を置いたのは，日本語の言い換えによる英作文の練習です。この力は，伝えたいことを簡単な英語で表現するための訓練となり，国公立大学二次試験の和文英訳に対応す

るためにも大きな力を発揮することでしょう。

英語を読んでから書いたり話したりする活動も充実させました。Part 1，2とも，知的な関心や，問題意識を喚起する文章を読んで感想や意見を述べる活動を設けています。また，Part 2には，読解した文章の構成を分析し，それに倣ってレッスンのテーマに沿った内容で1パラグラフを書くという活動があります。これは，*Departure I* で行った，書く内容と言語材料を準備した後に1パラグラフを書くという活動を深化させたものです。提示された語彙と表現を使って何をどう書くかを考えて，内容的にまとまった説得力ある文章を書く力をつけることを狙いとしています。さらにPart 3では，複数のパラグラフを書くための手法を，ブレインストーミングから骨格作り，肉付けと手順を踏んで示しています。

◆大学入試を見据えて

これまで行われてきた知識を多く学び取らせることが主眼の授業は，出題された問題に対処するためにその知識を援用することが目的であったため，クリティカルに発想するという視点が欠けていました。それに対して，自己表現を目的として積み上げる指導は，英文を読んだり聞いたりする活動を，問題を解くことからメッセージを受け取ろうとする姿勢に変え，読む時にも文章の構成を意識して読むことができるindependent readersへと育てていくことでしょう。また，前述のように，自己表現活動は大学入試のライティングの力を大きく伸ばします。高校入学時に英語がさほど得意でなかった生徒が，国公立大学の二次試験の自由作文は「楽勝でした」と喜んでいたことを思い出します。

私が講演などでよく使う喩えですが，これまでの受験指導は，山の頂を目指して険しい1本道を歯を食いしばって登らせていたようなものでした。しかし，All roads lead to Rome.――遠回りのように見えても，自らさまざまなことを体験しながら頂上に登るような指導こそが，学ぶ楽しさや意欲を与えるのではないでしょうか。そのような生徒は，また，別の山に登ろうとする意欲を持つことでしょう。

◆スピーチやディベートができる生徒を育てる

大学の英語教育も，発信型，プロジェクト型に変わろうとしています。グローバル社会で活躍するためのツールとしての英語力を養うためには，基礎力に加え，プレゼンテーション，スピーチ，ディベートなどのスキルが求められます。詰め込み型の受験指導で育ってきた学生たちは，容易にそれに対応することができず，英語に対してネガティブな気持ちを持ってしまいます。

Departure II では，Part 4，5で，このようなスキルを身につけるための懇切丁寧な手順を示しています。どの活動でも，Part 3の複数のパラグラフを書く練習を基礎に，実際に発表や討論をします。全国高校生ディベート大会の参加校も年々増加していますが，生徒たちは教室でディベートやディスカッションに生き生きと取り組むことでぐんぐん英語力を伸ばしています。指導書には詳しい指導手順が書かれていますので，指導経験のない先生方も，ぜひその楽しさを味わってみてください。

先ほど，受験指導を山の頂上に登ることに喩えましたが，受験の頂が英語教育の最終目標ではありません。さらに高い峰へと挑戦する意志を育て，その体力を鍛えることも，高校英語教育の大きな目的であると思います。

3年間でどのような生徒を育てるか――それは英語教育を通して，将来さまざまな問題や課題に積極的に立ち向かえる力をつけることではないでしょうか。「高校の英語教育を通じて学んだ最大のことは，自分の意見を持つこと」――そのような生徒を育てるために *Departure* がお役に立てることを切に願っています。

（やまおか　けんじ・立命館大学教授）

Departure English Expression

Departure が引き出す表現力

堤　　孝

Departure I のページをめくった時の衝撃は本物でした。Write on Your Own では英語が苦手な生徒にも，英語で自分を表現できる歓びを与えてくれる“魔法”が仕掛けられています。英語が苦手だということも忘れて，気づいたら英語で自分を語っているという次第です。“教師の力量”に左右されず，英語授業の理想形を生み出す魔法です。高校生が書きたくなるトピックと16歳の思考レベルに過不足ないモデル英文が，彼らに表現する意欲を与え続けるのです。

授業では「英語で自分の考えをクラスメートに伝えるために，*Departure I* を活用する」という意識を生徒と共有しています。文法項目を学んで，最終的に英語で表現できるようになるのではありません。最初に Write a Paragraph のタスクを確認し，最終的にそのトピックに関してお互いに口頭で意見交換するという目的を持つことで，そこにたどり着くために必要な文法事項を正確に学んでいくという発想です。

Departure I の武器の一つは Write a Paragraph の前にある Get Ready to Write です。用意されたトピックについてパラグラフを構成するのに必要な情報を生徒から魔法のように引き出していきます。英語を愛する一部の生徒を除いて，自分のことをまとまりのある英文で表現するのは，口で言うほど簡単ではありません。英語の蓄積が少ない高校生にいきなりアウトプットを強いるのは英語学習のモチベーションを奪い取る他にはあまり効果がないように思われます。書くプロセスを手助けするように周到に練られた Get Ready to Write がアウトプットに抵抗を持たない生徒を生み出しています。

このような形で，英語で自分を表現することに慣れた生徒たちは，本当によく書きます。かなり英語が苦手な生徒も短時間で“分量は”相当書きます。このような生徒は，書いている内容もクリエイティブなものが多く，こちらが英文の内容に引き込まれることもしばしばです。１年生の時点では意味を重視し，たくさん書くことを目標にしていますが，正確さは３年間の言語活動を通じて身につけていきます。

受験の英語もコミュニケーションの英語もありません。コミュニケーション英語Ⅰも英語表現Ⅰも，中学，高校，大学の英語も同様です。一つだけ分かったのは，「自分の考えを伝えることを目的に４技能満遍なく英語を使っていれば，受験に対応する力も自然についている」ということです。例年に比べるといわゆる演繹的な文法指導と文法演習量は圧倒的に少ないですが，コミュニケーション能力を測るテストだけでなく，模擬試験の結果も授業担当者の予想を遙かに超えています。

最後に，*Departure I* で Write a Paragraph まで行うと，一つの課を終えるのにそれだけ長く時間がかかります。残念ながら扱えない課が出てきたら，コミュニケーション英語Ⅰで取り上げるようにしています。何より Write a Paragraph を活用した表現活動を授業の中心に据えることで，*Departure I* の効果が最大限に発揮されると考えています。

（つつみ　たかし・青森県立田名部高等学校教諭）

Departure English Expression

『グラマーノート』から『ライティング・サポート・ノート』へ

――ワークブックを３年間活用する

吉田 健三

学習指導要領では，４技能を統合的に活用できる実践的なコミュニケーション能力を育成し，その基礎となる文法の定着を図るため，両者の指導を一体的に行うことが求められている。

Departure I・II はまさに学習指導要領に合致した教科書であり，その準拠問題集が，教科書を補完し，コミュニケーション能力（文法能力，社会言語的能力，方略能力，談話能力）の習得にどのように有効か，以下に詳説したい。

◆『グラマーノート』：基礎から場面に応じた会話へ

Departure I 準拠問題集『グラマーノート』（各課４頁構成）は，教科書の文法項目の解説（１頁），語句整序・空所補充・適語(句)選択による理解の確認（２頁），場面に応じた適切な表現（対話・モノローグ）を考える創造的な言語活動（３頁），１～３頁の学習項目の理解を発展させるための空所補充・対話完成・日本文の英語訳（４頁）の構成で，各課の演習ができる。

たとえば，７課では「奈実が足首を捻挫したので氷をいただけませんか，と部活の顧問の先生に頼みたい」という場面を設定し，学習項目（助動詞）を用いた適切な表現を考えさせ（解答例：Nami sprained her ankle. Would ［Could］ you give me some ice ?），文法能力だけでなく社会言語的能力の習得もねらいとしている。

◆『ライティング・サポート・ノート』：単文からパラグラフへ

Departure II 準拠問題集『ライティング・サポート・ノート（以下 *WS*）』（各課４頁構成：教科書 Part １・２対応）は，Part １で文法を扱うが，表現Ｉの切り口とは異なり，単文の組み立てに focus している。つまり，［表現したい内容のイメージ→適切な語彙と文構造の選択→書く・話す］という表現プロセスを各課で学習する。たとえば，６課では，動詞に続く文構造を考える。teach/explain/advise など異なった form を持つ動詞を用いた表現を学習する。（例）誰かに古典の文法を教えてもらいたい。I want someone to teach me the grammar of Japanese classics.

Part １・２共通の目標のひとつは，「言い換え」（paraphrasing）の方略能力を駆使して，一見難解な日本語表現でも既知の語彙で表現できるスキルを習得し，speaking や writing の応用活動の基礎を構築することである。（例）みんなは料理に追われている。⇒みんなは料理で忙しすぎる。They are too busy with the cooking.（Part ２：７課）

Part ２の最終目標は，文章に一貫性のある談話能力を発揮し paragraph で自己表現することである。（設問例）Describe one scene in a book, movie, comic, or animated cartoon that taught you a valuable lesson about life.（４課）

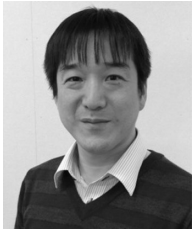
Departure の教科書準拠問題集は，表現Ｉ・IIを通して，コミュニケーション能力全般を確実に習得できるようにデザインされている。また *WS* の advanced ページは，大学入試問題も織り込み，受験対策としても活用できる。

（よしだ　けんぞう・兵庫県立長田高等学校教諭）

「英語で授業」はこう始めよう

――３年間を見据えた英語科教員のチームづくり

前田 昌寛



春になると立派になった卒業生が巣立ち，初々しい新入生が入学してきます。卒業生と新入生を比べると，３年間の指導の積み重ねがいかに大きいかを実感されるのではないでしょうか。本稿では「英語科教員チーム」として３年間を見据えた指導をどのように始めたら良いかを考えます。

◆「学習到達目標」を定め共有しよう

３年間を見据えるために，卒業時に求めたい英語力を明確にする必要があります。それを学習到達目標として「～できる」という CAN-DO 形式で表します。

〈学習到達目標の例〉

１学年	２学年	３学年
英語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとし，日常的で簡単な情報や考えなどを的確に理解したり…	英語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとし，社会的で基本的な情報や考えなどを的確に理解したり…	英語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとし，社会的・学術的な情報や考えなどを的確に理解したり…

１年生は「日常的で簡単な」情報や考えが，そして３年生は就職や進学を意識して「社会的・学術的な」情報や考えを扱います。これはただ単に教科書の内容がそのようになるということではなく，教師の発問もそれに応じて，例えば「英語の重要性」を扱ったレッスンでは，１年生には Why do you study English? という日常的な質問が，３年生には What role does English play in the world? という教室と社会を結ぶ発問に，同じトピックでも変化するのです。

◆３年間を見据えたレッスンの「流れ」を構築し共有しよう

学習到達目標は生徒の発達段階に合わせて変化しますが，１レッスンの授業構成は３年間をとおして系統的で普遍的な「流れ」を構築できます。例えば，レッスンの初めは全パートをとおして読ませる指導から入り，共有ハンドアウトを用いて各パートの指導を行い，レッスンのまとめには英作文を書かせ，それに基づいてスピーチ活動を行いパフォーマンス評価しましょう，という「流れ」を英語科チームで共有できれば，２年生あるいは３年生から担当したときもスムーズですし，ハンドアウトの共有や進度の統一ができ，指導を「何から始めて何で終わるか」が明確になります。

〈(例) １レッスンの流れ〉

配時	指導
１	①レッスン全体のとおし読み（予習させない）
↓	
パート数×２	②オーラルインタラクション（Presentation）
	③リーディング（Comprehension）
	④有意味な文法・音読練習（Practice）
	⑤ライティング・スピーキング（Production）
↓	
２	⑥レッスンまとめの英作文・スピーチ活動

〈各項目の指導詳細〉

① 「概要」を捉えてから「詳細」を読ませる指導です。まず，とおし読みをする前に，トピックに関する発問をします（「英語」について学ぶレッスンの例）。Today's story is about English.

There are about two billion people who speak English. などとトップダウン的な説明ではなく，生徒の思考のスイッチをONにさせる大きな発問をしてみます。*T:* How many languages are there in the world? / S_1 *:* I think there are 100? / S_2 *:* 200? / *T:* Actually, it is said that there are more than 6,000 languages in the world. / *Ss:* Really? / *T:* If you have a chance to talk with Chinese people in Italy, what language would you use? / S_3 *:* I would use English. / *T:* Why? / S_3 *:* Because English is useful when we communicate with people from other countries. / *T:* I see. Then, how many people in the world do you think speak English? などとクイズ形式にすると，テレビ番組で「答えはCMのあとで！」と言われたときのような知的欲求を生み出して本文を黙読させることができます。教師がWPMを測って数十秒ごとに板書し，読後は概要を確認する問いを用意すると良いでしょう。

② パートごとの口頭導入で，「概要」から「詳細」に入ります。例えば「日本人と英語学習」など具体的な話に入ったとき，ここでも教師が一方的に説明するのではなく，コミュニケーションをしながら本文と生徒を繋いでいきます。*T:* How many years have you been studying English? など生徒に関連のある質問から入ると良いでしょう。*S:* For three years. / *T:* OK, then, how many years do you think Japanese people have been studying English? By the way, some people say that Japanese have been studying math since Yamato era. How about English? など本文に興味を持たせる発問をします。コミュニケーションのための英語使用ではなく一方的な説明になると，生徒が理解できているのか不安になり不要な日本語が口を突いてしまいます。

③ 文字として書かれたものを英語（口頭）で理解させるためには，「本文に書かれた事実を確認する問い」「本文に書かれたことに関連した問い」「本文に書かれた事実からさらに隠れた筆者の意図を推論する問い」を組み合わせ，内容理解を図るのが良いでしょう。

④ 本文の内容理解が終わった後での音読です。文字を音声化し，このあとの表現活動につなげる目的があります。

⑤ 各パートすべてで大がかりな表現活動は時間的にもできないと思います。ここでは，レッスンまとめの英作文，スピーチ活動への準備（ネタ作り）を少しずつさせていきます。

⑥ パートごとの指導を通じて得た情報，考えたことをまとめて表現する時間です。制限時間や語数をCAN-DOリストに明記すると評価の基準となります。受信者としてALTを活用するとよりコミュニケーションを意識した活動となります。

◆「学力（英語力）」とは何かを認識し共有しよう

英語による授業で大学入試に対応できるのでしょうか。その答えは「対応できる」です。しかし注意が必要です。コミュニケーション指導と知識注入のための説明型授業との間でぶれるとどちらも中途半端な結果になるのです。本物のコミュニケーション指導をしっかりと行い，「知りたい」「伝えたい」というコミュニケーションへの「関心・意欲・態度」をしっかりと付けさせることで，内容のある言語のやり取りが起き，しっかりとした「思考・判断・表現」力の養成ができるのです。これが本当の意味で言語知識の定着と増加に繋がり，試験で知識の有無はもちろんその運用能力を試されてもびくともしない「学力（英語力）」を生徒に付けさせることができるのです。単語帳を嫌々開いて覚えたことを次々と忘れていくより，コミュニケーションという体験をとおして知識の獲得を図っていく方が，本当に付けさせたい真の「学力（英語力）」への道であることを「チーム」で共有するのが重要です。

（まえだ　まさひろ・石川県立金沢桜丘高等学校教諭）

デジタル教材を活用する英語授業

唐澤　博

◆板書が命？

板書技術は教師の生命線です。全体のレイアウト，文字サイズ，色使い，絵などの工夫，書くスピード，消すタイミング，さらに，教室全体への目配りをしながら立ち位置を考えての説明…など「わかりやすさ」を第一に板書していきます。しかし，ICT の進化のおかげで，黒板に書かなくても，授業はできるようになりました。離れた位置から，手元の PC やタブレットのデータを黒板に投影すればいいのです。手書き入力だってできますから，味のある文字も再現可能です。しかも，redo(繰り返し)/undo(元に戻す）で簡単に書き換えも可能。記録しておいて後で見直すことだってできます。「先生消さないで」なんて言われても，１回のクリックやタップ動作ですぐ復元。効率は抜群にあがります。

◆黒板はよい？

「黒板○よい。」というとき，○にどんな助詞が入るでしょうか。黒板はよい。黒板がよい。黒板もよい。黒板でよい。この最後の「黒板でよい」と言ってしまう人の心理は，電子黒板がなくても，黒板でできるから，何も他の手段なんかいらない…なのです。「電子黒板」vs「黒板」とか，「電子辞書」vs「紙の辞書」などの論争は，「代用」のレヴェルでの活用議論にとどまっているから，「黒板でいい」「紙の辞書でいい」で終わってしまうのです。ICT の活用で，つい最近まで想像もできなかった新しい授業スタイルが可能となります。つまり ICT 活用は，従来の教え方や，学び方の「代用」ではなく，新しい活用の議論をし，発展・進化していかなければなりません。そしてそれは，授業形態も含めた教育方法の新しい再デザイン化にもつながります。

◆効果的な授業に向けて

スマホ，タブレットなど，誰でも比較的簡単にネットにアクセスできるテクノロジーが日常生活の中に浸透している今，知識がある人（先生）から教わるという学習スタイルだけではもはや通用しない時代です。しかし，教え方が，生徒の理解を左右することはだれも否定しないでしょう。21 世紀になって，特にテクノロジーの知識が教科指導でも大切になってきたのです。英語教育のみならず，すべての教科科目で，３つの知識［1. content knowledge：教える内容についての知識 2. pedagogical knowledge：教え方に関する知識 3. technological knowledge：テクノロジーに関する知識］を基礎として，それぞれの知識がばらばらではなく，それぞれを補完させあいながら，効果的な授業を展開することが必要です。このテクノロジーの導入には，専門の工学的な知識が必要だと思いがちですが，だれにも扱えるものがあります。それが，プレゼンテーション用ソフトのパワーポイントです。ビジネスシーンでは当たり前のソフトですが，授業を進めるうえで，かなり効果的な使い方ができるのです。

◆文字は止まっているもの？

ニコニコ動画（ニコ動）をご存知でしょうか。

子どもたちの間で広がるこの人気動画配信サイトでは，動画画面にリアルタイムに書き込みがされ，どんどん流れる文字情報を読みとり，さらにそこへ書き込んでゆくという，我々世代には考えられないような情報交換がされています。昨今のTVでも必要以上と思えるような文字情報が画面を賑わしています。これは，映画のタイトルやクレジット，CMなどでも活用される，文字を動かして，アイディアや感情を効果的に伝えるkinetic typographyと言われるものの一つです。実はデジタルネイティブたちのスキャニング能力は，進化しているようなのです。動くものに反応する世代とでもいえるかもしれません。例えば，私の体験では，発音練習を先生の口頭によるだけの場合と，パワーポイントのアニメーション効果を使ったり，flashで作られた口腔内が動くもの（www.uiowa.edu/~acadtech/phonetics/）を見せたりする方法と比較をすると，発声に対する意欲は後者の方が上です。学習意欲に欠ける生徒でも，むきになって映し出される文字のスピードに負けないよう繰り返そうとします。「先生もう一度」と言われたらその気になっている証拠ですから，意欲面だけでも従来の訓練よりかなり効果が出ています。同じように，アニメーション効果を使って，文字を消したり現したりしながら，読ませることを促すやり方は，通り一遍の音読よりやる気を出させます。単語レヴェルでマスキングをかけて見えなくするなどの負荷をかける読ませ方でも，前を向かない，ぼそぼそと音読する，覚えようとしない生徒にかなり有効な方法です。例えば，音読の一つの方法である，read & look upは，pedagogical knowledge（教え方の知識）ですが，ICTを使わなくてももちろんできます。しかし，パワーポイント（technological knowledge）を使って，前を向かせたまま，文字を消せば同じことです。正しい姿勢で音読し続けることができます。初見の英文などを読ませる際は特に効果的です。

◆大修館版パワーポイントスライド集について

各社からデジタル教材が提供されていますが，レディーメイドの教材には限界があります。生徒の実情に合わせて，コンテンツの変更をしつつ，活用したいものです。特に大修館から提供されるパワーポイントデータは，*Departure I*なら，PDFが元になっていて，生徒の持つ教科書と全く同じレイアウトになっています。モニターに提示されれば，どこを学習しているかが一目瞭然です。また，練習問題の解答表示の際も確認しやすく聞き逃しはおきません。また，音声が適宜貼り付けられているので，CDなどのメディアでする頭出しなどの手間はかかりません。画面上で対象音声をクリックするだけです。必要なところをピンポイントで聞かせられます。また，リスニング教材としても活用できるようにスクリプトがマスキングしてあったり，解答を消したり，現したりクリックで簡単にできます。音読を促すために，文字を消していったり，現したりのアニメーション効果を使った練習もできるようになっています。

*Genius I, II*では，新出単語のフラッシュカードが音声付きで作られていますので，単語学習は効率的に行えます。もちろん，新たな単語を付け加えることも可能です。デジタル教材の最大の利点は，コピー・ペーストで使いまわしができることです。あるページをコピーした場合，アニメーション効果も同時にコピーされるので，文字情報を打ちかえるだけで，簡単に新たな単語を付け足していけます。複雑なデジタル教材でなく，このようなパワポを応用する方が効果的な場合もあるでしょう。

＊

パソコンやタブレットは道具です，すべてを解決するものではありません。クリックあるいはタップ・ティーチャーなどと揶揄されないよう，想像力と工夫をもって，デジタル教材を活用しましょう。

（からさわ　ひろし・浦和実業学園高等学校教諭）

CAN-DO リスト作成・活用
英語到達度指標
CEFR-J ガイドブック
（CD-ROM 付）
投野由紀夫　編

A５判・322頁
本体3,200円＋税

［評者］
小橋雅彦

CAN-DO リスト作成には欠かせない１冊

待望の書である。本書を読めば，CEFR に準拠しつつ，日本の教育環境における英語に関する枠組みに特化して開発された CEFR-J のことがすべて分かる。

３つのパートで構成された本書はガイドブックとしての使いやすさに配慮がなされ，節末には「まとめ」があり，「もっと知りたい方へ」で情報提供がなされている。これらの工夫が本書の利便性を大いに高めている。

Part 1「CAN-DO リストの原典：CEFR とは？」では，CEFR について，枠組みの設定から出版に至る経過，言語教育観，A1 や B2 で表されるレベルなど，CEFR-J を理解，活用する上で必要不可欠な項目が説明される。中でも，CEFR の理念である「行動指向アプローチ」は授業で扱うタスクへの指針を与えてくれる。

Part 2「CEFR-J を理解する」では，CEFR-J が基礎レベルをより詳細に枝分かれさせた理由や，良い CAN-DO リストの条件と CAN-DO リストのディスクリプタ（能力記述子／文）が含むべき要素が紹介されている。特に，「条件」と「要素」に関しては，CAN-DO リストを作成する際には常に念頭になくてはいけない。そして，CAN-DO リストの妥当性検証について CEFR-J が取った検証方法が述べられている。CAN-DO リストは指導と評価に関わるものであるから，独自に作成する CAN-DO リストにも妥当性が保証されなくてはならない。本書では，このことについて，CEFR-J Can do ディスクリプタ・データベースからのディスクリプタの利用と改変という２つの活用方法が紹介されており，そこで大幅に改変した際の実用的な検証方法として，並べ替え調査を紹介している。CAN-DO リストの妥当性検証に是非とも参考にしたい方法である。

Part 3「CEFR-J を活用する」では，レベルや領域を軸とした CAN-DO の特徴と指導法，文法・語彙指導，言語テストについてなど，CEFR-J を基にした場合にどのような言語活動を授業で展開できるかを具体的に示している。特に，「やりとり」と「発表」の２領域についての内容には注目されたい。「即興性」に関する大きなヒントがここにある。

そして，付属 CD-ROM には CEFR-J の活用度を高めるために CEFR-J 本体はもちろん，Can do ディスクリプタ・データベースや CEFR-J Wordlist などが用意されている。

本書のおかげで，本校も CEFR-J に準拠しつつ学習指導要領との整合性を図った，小中高の CAN-DO リストを作成することができ，そのリストを用いた指導と評価の事例の集積が始まった。

（こばし　まさひこ・
広島大学附属中・高等学校教諭）

［新版］日本人と英米人
身ぶり・行動パターンの比較
ジェイムズ・カーカップ
中野道雄　著

四六判・224頁
本体1,800円＋税

［評者］
柴原早苗

自立学習のきっかけとなる１冊

「大統領へのインタビューなのに，なぜキャスターは足を組んでいるのだろう？」私は日ごろ放送通訳者として英語ニュースを日本語に同時通訳している。その際，頻繁に感じるのがキャスターや記者たちの動作。要人の前でも腕や足を組む，顔をしかめるなど，日本のニュースでは見かけない動きが目立つ。一方，幼少期に私は英国の現地校に通っていたのだが，朝礼中に鼻をすすったところ，級友に注意された。日本では鼻をすするぐらいで眉をひそめられることはない。なぜだろう，という思いがずっとあった。

本書は1973年に発行され，ロングセラーとなった『日本人と英米人』の新版である。昭和48年と言えば日本における外国人の存在自体が珍しかった時代である。著者の一人，ジェイムズ・カーカップ氏はイギリス出身の詩人で翻訳家。東北大学を始め，国内の大学で教鞭を取っていた。本書は氏の日本在住経験に基づき，日本人と英米人の身ぶりや行動を多角的に分析したものである。共著者である英語学者の中野道雄教授も，自らの海外経験をもとに興味深いエピソードを寄せている。

第１部には身振りや行動パター

ンに対する両氏の分析が綴られ，第２部には101の動作が解説されている。読み物として好きなところから読むのももちろん楽しい。目次に見出しが詳しく記されているので，事典として参照することもできるだろう。しかしそれだけではもったいない。そこで，英語指導に携わる者として以下の３つの活用法をご紹介したい。

まず「動画や映画の利用」である。動画投稿サイトや映画などを学習者に見せ，動作に注目させる。どのような文脈でその動きが見られたのか，日本人はその動作をするか，否であれば日本人ならどういった動きをするかなど，考えてみるのも興味深い。本書で紹介されている解説も併せて読むことで，その動きの文化的背景への理解が深まるはずだ。

２つ目として活用できるのが「日本の小説」である。登場人物の動作に関する描写を選び出し，本書をひもといてみる。日本では一般的でも，英米人から見れば珍しい動きかもしれないことがわかる。英訳版のある小説ならば，その箇所が英語でどう訳されているか読み比べるのも楽しい。

３つ目は「自分でイラストを描く作業」である。第２部に掲載されている101の身ぶりや行動を本の余白にイラストにしてみてはどうだろう。自分だけのオリジナル事典が完成するはずだ。

これからの英語学習者に求められるのは「自ら工夫し，自立した学びを実践すること」と私は考える。読者は本書をきっかけに，非言語的なメッセージまで汲み取るべく意識が高まるであろう。

（しばはら　さなえ・放送通訳者，大学講師）

ビアトリクス・ポターを訪ねるイギリス湖水地方の旅

ピーターラビットの故郷をめぐって

北野佐久子　著

A5判・218頁
本体2,300円＋税

［評者］
平原麻子

学校図書館に置きたい１冊

世界で一番有名なネズミはミッキーマウス，一番有名なウサギはピーターラビット。

かつてビアトリクス・ポターとピーターといえば，中高の英語教科書に定番教材として載っていた時期があった。最近はあまり見かけなくなり残念なことではあるが，彼女の描く愛らしい画の数々を知らない人はいないだろう。

本書は，ナショナル・トラスト運動も含め，ポターの生涯にわたるイギリス湖水地方との触れ合いを軸に，100年以上も前のイギリスでの暮らしや，『ピーターラビットのおはなし』に始まる一連の絵本誕生の秘密を丁寧に描いている。あまり知られていないポターの一面にも光をあてており，多くの発見がある画期的な書物だ。

まずは手に取って，その美しい装丁に読書の喜びを予感する。ページを開けば，著者自身の足と目と耳を存分に駆使したフィールドワークの成果とともに，豊富な写真や図版の数々と湖水地方の詳しい地図。さらには美味しそうなイギリス伝統菓子のレシピまで満載の贅沢さで，幸福な読書体験にしばし身をゆだねる。

唯一の欠点は，あまりにもロマンティックな外観から，男性が，自分の読むべき本だと気がつかないかもしれないことである。

そういうわけで本書は，絵本好きの乙女（年代問わず）へのプレゼントとしてぴったりなように見えて，実のところ置かれるべきもっとも適切な場所は小中高の学校図書館なのである。

それは以下の理由による。

①　調べ学習の良き友

本書は様々なキーワードでの検索が可能だ。たとえば，イギリス湖水地方／ナショナル・トラスト／ピーターラビット絵本／19世紀イギリスの暮らし／ビアトリクス・ポターの生涯／イギリスのお菓子，等々。

本書の巻末には詳しい索引と年譜が添付されており，地理・歴史・芸術など幅広い分野での調べ学習に対応することができるうえ，湖水地方の観光ガイドブックとしてさえも機能する。

②　ポターはリケジョのはしり

本書を読むと，実はキノコ研究者になりたかった，というポターの意外な一面を知る。また，彼女が学者の目で描いた美しいキノコの絵も採録されている。当時の保守的な社会でその夢は叶わなかったが，創造的で人々に喜びを与える仕事をし，かつ自分の稼いだお金を使って今につながる社会貢献をなした彼女の生き方を，将来を考える時期の感性豊かな若者たちにぜひ読んでもらいたいと思う。

昨今の学校図書館は情報センターとしての役割を担い，生徒の主体的な学習の場としての活躍が期待されている。英語科からの推薦図書に，この１冊を加えてみてはいかがだろうか。

（ひらはら　あさこ・筑波大学附属駒場中・高等学校教諭）

大修館書店の本

◆国内の主要学習者コーパスを１冊でカバー
英語学習者コーパス活用ハンドブック
投野由紀夫・金子朝子・杉浦正利・和泉絵美＝編著
（A5 判・258頁・本体2,200円＋税）

◆小学校英語，ここだけおさえておけば大丈夫！
小学校の外国語活動　基本の「き」
酒井英樹＝著
（A5 判・176頁・本体1,500円＋税）

◆粘土板からネットまで5000年の壮大な物語
文字の言語学―現代文字論入門
フロリアン・クルマス＝著　斎藤伸治＝訳
（A5 判・336頁・本体2,500円＋税）

◆時代の変化を“体感”しながら学ぶ英語史
聖書でたどる英語の歴史
寺澤盾＝著
（A5 判・262頁・本体2,200円＋税）

◆万物を慈しむ日本人の「気心」を，世界に
日本人らしさの発見
芳賀綏＝著
（四六判・266頁・本体2,000円＋税）

お知らせ

小社英語教科書についてのご質問，感想などを小誌編集部宛にお寄せください。「G.C.D. 教科書 Question Box」で随時ご紹介・ご回答してまいります。

また，小社教科書を使った授業の紹介などのご投稿（郵送のみ）をお待ちしております。（採否のご連絡は致しておりません。また，原稿はお返ししません。）

なお，小社ホームページ「燕館」には小社教科書の内容をご案内しているサイトがございます。ここでは，英語の先生方に役立つ様々な情報も提供しております。

http://www.taishukan.co.jp/gcdroom/

営業便り

▶春たけなわのこの頃，先生方におかれましては日々ご多忙のことと存じます。新年度に際し小社教科書をご採択いただき，また小社辞典をご採択・ご推薦いただき厚くお礼を申し上げます。▶さて私には小社入社以前に６年間の英語教員歴と２年間の青年海外協力隊の経験があります。高校で勤務していた頃の自分自身を思い返せば，生徒に訳させた日本語を生徒全員がノートに書き取るような典型的な訳読式の授業でした。生徒も私もそれで満足していたように思います。▶その後，海外生活を経て大修館に入社してはや８年，この間，高校での英語教育の変化を常に身近に感じてまいりました。「英語で授業」を謳った新指導要領の開始から丸１年が経ち，先生方は英語で進行する授業展開にあの手この手の試みをされているかと想像いたします。▶採択ご検討の時期までに小社各担当者が先生方のお手元に新課程教科書見本をご用意させていただきます。英語で授業を行うことにも配慮された大修館の教科書を是非一度手にとってご覧ください。

（大阪支店　田中朋樹）

編集後記

▶この春「コミュニケーション英語Ⅲ」のご採用見本が完成し，高校３年間の教科書が出そろいます。▶今回の学習指導要領改訂で大きな話題を呼んだことのひとつが，小学校外国語活動の必修化でしょう。『英語ノート』（現 *Hi, friends!*）にはデジタル教材が用意され，電子黒板の活用が進みました。来年度から，その外国語活動を少なくとも1年間（移行期間も含めると２年間）経験した生徒たちが高校に入学してきます。彼らに対して，高校で ICT を使った英語授業を行うのは，ごく自然な流れになるのかもしれません。▶今号に寄稿くださった唐澤博先生は，「（電子黒板ではなく）黒板でよい」という時の心理は，ICT 活用の授業が従来の授業の「代用」レベルにとどまっていると指摘されています。教科書・教材を編集する立場としても，紙の代用ではない，「デジタルだからよい」といえる教科書・教材とは何か，を真剣に考える時が来たことを痛感しています。

（cai）

Genius·Compass·Departure
英語通信

第53号
2014年４月１日発行
（年２回発行）

編集人：©「G.C.D.英語通信」編集部
発行人：鈴木一行
発行所：株式会社　大修館書店
〒113-8541　東京都文京区湯島２-１-１
電話（03）3868-2293（編集部）／（03）3868-2651（販売部）
［出版情報URL］http://www.taishukan.co.jp　［振替］00190-7-40504
印刷・製本：文唱堂印刷株式会社

Ⓡ 本誌のコピー，スキャン，デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本誌を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは，たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。